

報道関係各位

PRESS RELEASE2017.01.26

## Socially Engaged Art ソーシャリー・エンゲイジド・アート展 社会を動かすアートの新潮流

2017年2月18日(土)~3月5日(日) @アーツ千代田3331 1階メインギャラリー



画像はイメージです。1. アイ・ウェイウェイ《ライフジャケットの輪》2017年 Photo © Ai Weiwei Studio 2. マリアン・ダイビング・リフレックス《子どもたちによるヘアカット》Photo by John Lauener 3. ペドロ・レイエス《銃をシャベルに》2007年 Photo © Stephane Rambaud 4. 西尾美也《Self Select #79 (Cotonou)》2012年 5. ミリメーター《Street Sleeping Service》2015年 6. 明日少女隊《Girls Power Parade》2016年

### 内外の15アーティストを紹介。日本で初めて、本格的にSEAの可能性を探る展覧会

近年、アートの新しい潮流として注目されている「ソーシャリー・エンゲイジド・アート(SEA)」は、現実社会に積極的に関わり、人びととの対話や協働のプロセスを通じて、何らかの社会変革(ソーシャル・チェンジ)をもたらそうとするアート活動の総称です。本展では、海外の代表的プロジェクトを紹介するとともに、東日本大震災以降顕著となった、社会への関わりを強く意識した日本人アーティストの活動に注目し、日本におけるSEAの文脈と可能性を探ります。

#### 海外から社会派アートのフロントランナーが参加

難民問題を世界に問いかけるアイ・ウェイウェイは、2016年に発表したライフ・ジャケットのシリーズより、本展のために新作を出品します。

銃社会からの脱却を訴えるペドロ・レイエスは、2008年から銃を回収するキャンペーンを展開。集めた銃をシャベルに作り変え、それを使って植樹を行うプロジェクト《銃をシャベルに》で知られています。今回は、港区の小学校で4年生60人とともに植樹し、そのシャベルを展示します。

マリアン・ダイビング・リフレックスは、大人と子どもの関係性を見直すパフォーマンス《子どもたちによるヘアカット》を世界35都市で開催してきました。今回、日本で初めて、東京の子どもたちが挑戦。

#### 日本の3アーティストが新しいSEAプロジェクトに取り組む

衣服とコミュニケーションの関係性に着目した作品を展開する西尾美也(にしおよしなり)、様々な性別の第4世代若手フェミニストによる社会派アートグループ「明日少女隊」(あしたしょうじょたい)、小さな都市計画を提唱するミリメーターが、現代の課題の向き合う新しいプロジェクトを、会場の内外で実施します。

## プロジェクト in Tokyo

アーティスト名	プロジェクト名/概要
ペドロ・レイエス (メキシコ)	銃をシャベルに
<p>レイエスは、1972年、メキシコ・シティ生まれ。メキシコを拠点に、彫刻、絵画、音楽、パフォーマンスと多様な領域で活動。今回紹介する《銃をシャベルに》は、2008年から継続するSEAの代表的プロジェクトのひとつ。麻薬取引の拠点で発砲事件の絶えないメキシコの街クリアカンで、市民から銃を回収し、集まった銃を熔解してシャベルをつくり、世界各地で植樹と展示を行っている。本展では、2月15日に港区の筈小学校4年生が、来日するレイエスとともに「1/2成人式」記念で校庭に木を植え、そのシャベルを展示する（植樹は森美術館によるパブリックプログラム）。「自分にとってアートとは本質的にネガティブなものをポジティブなものに変える方法を見つけることであり、社会や人々の意識を変えるような作品を作りたい」とレイエスは語っている。</p>	
ママリアン・ダイビング・リフレックス (カナダ)	子どもたちによるヘアカット
<p>芸術ディレクター、ダレン・オドネルを中心とするアート&amp;リサーチ集団が企画制作し、カナダをはじめ世界各地で行っているプロジェクト。10~14歳の子どもたちが、プロの美容師から講習を受けた後、本物の美容室を借り、大人の客に無料のヘアカット・サービスを行う。そのねらいは、「子どもたちには美的・創造的な決定のできる個人としての責任と自信を持たせ、大人たちには、従来の大人と子どもの力関係が逆転した非日常的な体験により、子どもの能力を見直すきっかけを提供する」。今回、カナダから本企画専門のアーティストを招き、「東京未来大学こどもみらい園、みらいフリースクール」（足立区）で学ぶ子どもたちが、東京ビューティーアート専門学校（文京区）で研修を受け、2月26日（日）に同校のサロンで、ヘアカットに挑戦する。</p>	
西尾 美也 (にしお よしなり)	Self Select: Migrants in Tokyo
<p>西尾美也は、装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開しているアーティスト。代表作の《Self Select》シリーズでは、世界の諸都市で偶然すれ違った通行人に現地の言葉でお願いし、衣服を交換する姿を写真や映像で作品化してきた。本展では、東京に暮らす海外からの移住者が、街中で見ず知らずの日本人と衣服の交換を試み、その経験をもとに展覧会場で自分のための新しい服を作る。〈移住者〉と〈わたしたち〉という関係を通して、自らの装いや文化について、表現することや境界を越えることについて共に考えるための場を生み出す。</p>	
明日少女隊 (あしたしょうじょたい)	Believe -わたしは知ってる- 女子カフェ
<p>明日少女隊は「すべての性の平等がみんなの幸せ」をテーマに、2015年に誕生した、匿名でマスクを装着して活動する第4世代若手フェミニスト・アートグループ。これまで、展覧会やパフォーマンス、レクチャー、インターネットを通じて、日本の女性が抱える社会問題についての作品の発表やアクティビズムを展開してきた。ストーリー・パフォーマンス『ビリーブ・マーチ』は、性暴力に反対し、今年1月から国会で審議される刑法（性犯罪）を変えるためのキャンペーン《Believe-わたしは知ってる-》の一環として制作。キャンペーンで行った性犯罪についてのレクチャーで、紙製のマスクに参加者からメッセージを集め、そのマスクを装着して国会前などでパフォーマンスを行う。展示はビリーブ・マーチの記録映像と、コミュニティスペース『女子カカフェ』。観客と女性問題について語る場を作る。</p>	
ミリメーター	URBANING_U 都市の学校
<p>ミリメーターは、2000年、宮口明子と笠置秀紀によって活動開始した建築・デザインユニット。ミクロな視点と横断的な戦術で都市空間や公共空間に焦点を当てた活動を続ける。今回の「URBANING_U (アーバニング・ユー) 都市の学校」は、私たち個人個人の都市空間、公共空間に対するリテラシー（読み解き能力）を醸成し、自らの手で空間を取り戻し、私たち（不特定多数）の場所を「私の場所」にすることを目的とした、ラーニング・プログラム。その開校にあたって「都市を血肉化せよ！」と題したプレスクールを開催。実際の都市をフィールドに、雑居ビルの屋上を拠点として、1泊2日の集中合宿を行い、普段は思いも寄らないような都市体験を通じて、都市空間と「私」との関わりを考察・議論をする。詳しくは、URBANING_Uウェブサイト参照。http://urbaning.org/</p>	

## 会場展示

	アーティスト名	プロジェクト名	概要
毎 日	アイ・ウェイウェイ (中国)	ライフジャケットの輪	アイ・ウェイウェイは、「ドクメンタ」展(2007年)、2008年開催の北京五輪メインスタジアム《鳥の巣》設計で注目されるが、同年の四川大地震で亡くなった何千人もの子どもたちの調査に着手し、人権運動を本格化させると、政府による直接的な介入が日常化する。2011年4月に拘束され、81日間の拘留。現在はベルリンを拠点に活動。2016年、トルコからギリシアのレスボス島に流れ着いた難民たちが使ったライフジャケット14,000枚をベルリンの劇場の柱に巻き付けた作品で、難民問題に揺れる国際世界に問題提起をした。本展では、新作《ライフジャケットの輪》を発表。
	スザンヌ・レイシー (米国)	あなた自身の手で	1970年代からレイシーは、レイプやDVの問題に関して、女性被害者に焦点を当てたパブリック・アートワークを行ってきたが、これは男性に積極的な参加を求め、その意識変革をテーマとしたプロジェクト。2012年にエクアドルで行われた、暴力被害体験を綴った女性からの手紙を集めるキャンペーンに触発されたレイシーは、同じ問題意識を持つ地元組織とともに2年間の活動を経て、2016年、様々な年代・職業の男性300人が見知らぬ女性からの手紙を闘牛場のリングで読むという、壮観なパフォーマンスを演出した。その模様を動画と写真で紹介する。
	アーティスト・イン・レジデンス・プログラム フィフス・シーズン (オランダ)		「フィフス・シーズン」とは、オランダの精神科医療施設の敷地内のスタジオ・ハウスにアーティストが1シーズン(3カ月)滞在し、その体験から自身の作品制作を行うレジデンス・プログラム。1998年の創設からこれまでに100人以上が滞在してきたが、本展では、4人のアートワーク(Frank Koolenの《カラオケ・パピリオン》、Annaleen Liuwesの写真作品、Anouk Kruithofの患者と誕生日を祝うプロジェクト、日本人アーティストあべさやかのドローイング)を紹介。また、フィフス・シーズンの姉妹プロジェクトとしてニューヨークの病院でスタートした「Beautiful Distress」によるアーティスト・イン・レジデンスも紹介する。
	パーク・フィクション/ マルギット・ツェンキ/ クリストフ・シエー ファー (ドイツ)	パーク・フィクション	1995年、ハンブルグ(ドイツ) 港湾地区に面した貧困地区ザンクト・パウリの開発計画に反対してコミュニティ・プロジェクトを開始。住民による港湾委員会とアーティスト(クリストフ・シエーファー)、映像作家(マルギット・ツェンキ)が主導し、単なる抗議運動ではなく、住民とともに開発予定地を、ゲーム、ピクニックやフェスティバル、展示、集会などに利用し続けた。また“プランニング・キット”をつくり、近隣を回って、住民から要望を集め、実際の公園計画を作成。その結果、2005年、市は計画を断念し、彼らの公園が実現した。本展ではそのプロセスや手法の全貌を紹介する。
	リック・ロウ、ジェイムス・ ベティソン、パート・ロング、 ジェシー・ロット、フロイ ド・ニューサム、パート・サ ンプルズ、ジョージ・スミス (米国)	プロジェクト・ロウ・ ハウス	プロジェクト・ロウ・ハウスは、リック・ロウ他7人のアーティストによって、ヒューストンの「第3区」で1993年に始まった、アートを触媒としてコミュニティの再生を目指すプロジェクト。ロウは1961年、アラバマ州生まれ。社会問題をテーマとした絵画や彫刻作品を制作していたが、アフリカ系アメリカ人居住区として長い歴史を持つ第3区を描き続けた画家ジョン・ピガーズや、ヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻」に影響を受け、コミュニティのニーズに直接応える活動に方向転換。荒廃した22戸の住宅を仲間とともに買い取り、改修して、アートと社会サービスを複合したプロジェクトに展開していった。その歴史と幅広い取り組みを、年表や動画で紹介する。
ト ウ	高川和也	不安の体系	自分(達)が抱える様々な「不安」を言語化し、繋ぎ合わせたダイアグラム。個々が感じている不安が、互いに関係を結ばれていくことで、社会が抱える「漠然とした不安」を表象し得るのか、または無限に膨張していくのか。ダイアグラムの制作という過程の中で不安そのものの正体を理解しようとする新作。
	丹羽良徳	より若い者がより歳をとった者を教育する	「教師と学生という固定された立場をあえて、しかも明確に逆転させた授業を実施する」というプランを教育委員会へ提出。普段はひっくり返ることのない学校教育の現場でそれぞれ立場を変更し、その苦悩の逆転劇のなかに、本質的な『教育』の可能性と逃れられないジレンマを参加者に与え、人が人を教育することの不可能性を考えようと企画。その結果は、悉く不許可。その失敗に終わる交渉の過程をビデオカメラで記録し、交渉の場にはいなかった子どもたちが教育委員会や作家に扮し架空の交渉の続きを演劇として実演した。その記録ビデオを上映する。
	藤元 明	2021	戦後からの急成長を遂げていた1964年の東京オリンピックから50年以上経つ現在。2020年に予定されている東京オリンピックは、以前とは異なるコンセプトで語られなくては行けないだろう。多くの日本人が「2020年」というシンボルに向かっては猪突猛進できるかもしれないが、過去の歴史から学ぶならば、私たちはさらにその先に目を向けるべきなのではないだろうか。本作は、そんな人々の意識の変容を促す簡潔なアイコンとして「2021」を提示。これまでも社会現象を的確な視点で作品化してきた藤元明の新作。
	山田健二	漕港河会議	近年大規模な開発が続いている上海内陸の古都「朱家角」。山田は、開発のために強制退去を余儀なくされた市民や開発後に誘致された新しい市民を集め、この地域を流れる漕港河の船上での議論を行い、その様子を監視カメラで撮影した。この地域に近い南湖の船上で1921年に行われた中国共産党第一会議「南湖会議」の形式を模して行ったこの市民会議は、政府がソーシャル・メディア等を通して国民をモニターする環境を逆手に取ることで、歴史の書き手である国家や政府に対し、歴史記述や歴史遺産へ逆説的にアプローチする方法を示唆している。
	若木くるみ	ふたりのユニフォーム	若木くるみは「走る」というシンプルな行為をきっかけに、様々な作品を制作してきた。本作は、これまでマラソン大会への参加を通じて交流してきた台湾で、2016年2月に起こった地震災害の復興に向け、友人の武内明子と共にメッセージを描き込んだユニフォームを身に纏い南横超級マラソンに参加したプロジェクト作品。アーティストという枠を外れ、国境を超えた集団に直接的な介入を試みる若木の「行為」は、面白半分に見えながらも、安易な協同プロセスへのカウンターのような力強さも読み取れる。

※展示内容には変更の可能性があります。

## 本展レクチャー・シリーズ 参加アーティストによる連続トーク

- 2月18日(土) 14:00~16:00 ペドロ・レイエス
- 2月19日(日) 14:00~16:00 パーク・フィクション + 藤元明 + 笠置秀紀(ミリメーター)
- 2月24日(金) 19:00~21:00 ダレン・オドネル(ママリアン・ダイビング・リフレックス)
- 3月2日(木) 19:00~21:00 フィフス・シーズン

会場: アーツ千代田3331 ※開催時間に変更の可能性があります。

## 関連イベント

- 2月13日(月) 10:00~18:00  
森美術館国際シンポジウム「現代美術館は、新しい『学び』の場となり得るか? エデュケーションからラーニングへ」  
会場: アカデミーヒルズ(六本木ヒルズ森タワー49階)

※2月14日より森美術館と各機関が連携し、アートと社会について考える「ラーニングウィーク」を開催(詳細は森美術館のwebサイト参照)

- 2月20日(月) 19:00~21:00  
ローカルな人々の知恵「下からの」都市計画(仮題)  
マルギット・ツェンキ&クリストフ・シェーファー(パーク・フィクション)+佐藤慎也  
会場: 東京ドイツ文化センター 1階ホール

- 2月22日(水) 19:00~21:00  
「ヒストリオグラファーとしてのアーティスト?: 記憶、忘却、物語」  
モデレーター: 崔敬華 登壇アーティスト: 藤井光、山田健二、山本浩貴、横谷奈歩  
会場: アーツ千代田3331 メインギャラリー 主催: nap gallery

- 2月26日(日) 13:00~17:00  
「ビリーブ・トーク&マーチ」明日少女隊、ちゃぶ台返し女子アクション、怒れる女子会  
会場: アーツ千代田3331 B105室

- 2月26日(日) 17:30~19:00 (先着20名、要予約)  
ギャラリートーク&セッション「アイ・ウェイウェイの新作《ライフジャケットの輪》とその背景」  
講師: 片岡真実(森美術館チーフキュレーター) インタビュア: 村尾信尚(ニュースZEROメインキャスター)  
会場: アーツ千代田3331

## 【開催概要】

会期	2017年2月18日(土)~3月5日(日) 11時~20時(最終入場19時) 休館日なし
会場	アーツ千代田3331 1階メインギャラリー 〒101-0021 東京都千代田区外神田6丁目11-14
入場料	一般 1,000円 学生 500円(要学生証)
主催	特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター
助成	文化庁、アーツカウンシル東京、資生堂
特別協力	オランダ王国大使館、ゲーテ・インスティトゥート/東京ドイツ文化センター
後援	カナダ大使館、メキシコ大使館、環境芸術学会
企画協力	森美術館
協力	Wonder Art Production、学校法人三幸学園(東京未来大学こどもみらい園/みらいフリースクール、東京ビューティーアート専門学校)、白水デジタルプリント工房、村尾信尚、OGU MAG、HIGURE
お問合せ	特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター website: <a href="http://www.art-society.com/">http://www.art-society.com/</a> email: <a href="mailto:exhibition@art-society.com">exhibition@art-society.com</a> ※広報用画像ご希望の方は、お問い合わせください。

- 最新情報・予約受付は、Facebookをご覧ください。 <https://www.facebook.com/npoartsociety/>

## アーティスト プロフィール

### プロジェクト実施アーティスト

#### ■ 海外

##### ペドロ・レイエス Pedro Reyes

1972年、メキシコ・シティ生まれ。メキシコを拠点に、彫刻、絵画、音楽、パフォーマンスと多様な領域で活動する。2008年から継続するプロジェクト《銃をシャベルに》では、回収した銃をシャベルに作り替えて植樹に使い、《武装解除》(2012年)では、銃を自動演奏の楽器へと変身させた。「自分にとってアートとは本質的にネガティブなものをポジティブなものに変える方法を見つけることであり、社会や人々の意識を変えるような作品を作りたい」と語っている。第1回《人々の国際連合》(ニューヨーク、2013年)では、国籍や言語の異なる人々が集い、世界の諸問題について、社会学、心理学、演劇、アートなどの手法を駆使してユーモア溢れる創造的な解決を試みた。第3回は金沢で開催。

##### マリアン・ダイビング・リフレックス/ダレン・オドネル Mammalian Diving Reflex/Darren O'Donnell

マリアン・ダイビング・リフレックス(MDR)は、1965年、カナダ生まれの小説家、エッセイスト、劇作家、パフォーマーのダレン・オドネルにより、1993年設立されたアート&リサーチ集団。MDR設立から2003年まではアーティストック・ディレクター、オドネルの舞台パフォーマンスが中心だったが、伝統的なヨーロッパ演劇に限界を感じ、アプローチの幅を広げ、学校やコミュニティセンター、市役所、老人ホーム、国際アート・フェスティバルなどとのコラボレーションで、“社会の鍼治療(Social Acupuncture)”と称する、遊び心にあふれ、しかも挑発的な参加型パフォーマンスを行うようになった。

#### ■ 日本

##### 西尾美也 Yoshinari Nishio

1982年、奈良県生まれ。同県在住。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員(ケニア共和国ナイロビ)などを経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営のほか、ファッションブランド「FORM ON WORDS」も手がける。主な個展に「間を縫う」(3331ギャラリー、2011年)など。近年の主なグループ展に「拡張するファッション」(水戸美術館、2014年)、「あいちトリエンナーレ2016」、「さいたまトリエンナーレ2016」など。

##### 明日少女隊(あしたしょうじょたい) Tomorrow Girls Troop

2015年、様々な性別の第4世代若手フェミニストによる社会派アートグループとして結成。「男性、女性、いろんな性、みんなが平等でHappyな社会を」をモットーに 展覧会やパフォーマンス、レクチャー、SNSでのコミュニティ作りなどを社会運動の一環と捉え、幅広く活動する。主なグループ展に「Feminist Fan in Japan and Friends」(アーツスペース遊工房、2016年)、「Normal Family」(Last Projects、ロサンゼルス、2015年)、パフォーマンスでは《Girls Power Parade》(表参道、2016年)、レクチャーでは「保育園落ちた！選挙攻略法2016」(上智大学、2016年)など。

##### ミリメーター mi-ri meter

2000年、宮口明子と笠置秀紀によって活動開始。建築、フィールドワーク、プロジェクトなど、ミクロな視点と横断的な戦術で都市空間や公共空間に焦点を当てた活動を続ける。日常を丹念に観察し、空間と社会の様々な規範を解きほぐしながら、一人ひとりが都市に関わる「視点」や「空間」を提示している。主な活動に《Tents 24》(セントラルイースト東京、2005年)、《アーツ前橋 交流スペース》(前橋市、2013年)、《仙台文学館を再編集する》(SSDせんだいスクールオブデザイン、2014年)、《川と路》(鳥取芸術祭、2015年)など。

## 会場展示アーティスト（海外）

### アイ・ウェイウェイ Ai Weiwei

1957年、北京生まれ。父アイ・チンの下放により、生後すぐに一家で新疆ウイグル自治区に移住し16年を過ごす。1978年に渡米し、西洋の近現代美術と出会う。1993年に帰国。「ドクメンタ」展（2007年）、2008年開催の北京五輪メインスタジアム《鳥の巣》設計。同年の四川大地震で亡くなった何千人もの子どもたちの調査に着手し、人権運動を本格化させると、政府による直接的な介入が日常化する。森美術館での個展（2009年）は46万人を動員し、その後国際巡回するが、会期中の2011年4月に拘束され、81日間の拘留。現在はベルリンを拠点に活動。2016年、トルコからギリシアのレスボス島に流れ着いた難民たちが使ったライフジャケット14,000枚をベルリンの劇場の柱に巻き付けた作品で、難民問題に揺れるドイツや欧州、そして世界に問題提起をした。

### スザンヌ・レイシー Suzanne Lacy

1945年、カリフォルニア州生まれ。1970年代からアーティスト、アクティビスト、教育者、著述家として、実践と理論の両面で活動し、現在はLAのOtis College of Art and Designの大学院「Public Practice」コースで教鞭をとっている。レイプ、バイオレンス、高齢化問題、青少年問題など取り組むテーマは社会的だが、その参加型のアートワークは、メディアでの報道を勘案し、視覚的にも印象的な演出が特徴である。代表的プロジェクトには、LAの地図にレイプ発生地をスタンプする《5月の3週間》（1977年）、高齢女性による対話パフォーマンス《クリスタル・キルト》（1987年）、高校生とのコラボレーション《ルーフ・イズ・オン・ファイア》（1994年）などがある。

### フィフス・シーズン Fifth Season

オランダ、デン・ドルダー（Den Dolder）にある精神科医療施設アルトレヒト（Altrecht）の敷地内にあるアーティスト・イン・レジデンス。精神医療と社会の間のギャップを埋めることを目的とし、1998年スザンヌ・オクセナーにより設立された。それ以来、精神病患者に対する偏見や差別などに関する問題を提起し、一人の人間として患者たちの話を社会に伝え続けている。春・夏・秋・冬の1シーズン（3ヵ月）、アーティストは広大な施設敷地内に建つスタジオ・ハウスで生活し、自身の観点から精神医学にアプローチする。それに加え、施設の患者やスタッフと日常的に接触しながら共に作品制作する機会が提供される。ここで制作された作品はオランダ国内外のギャラリーや美術館はもとより、精神保健機関などにおいて定期的に展示され、その成果は出版物としてまとめられる。これまでに、フィフス・シーズンには100人以上の著名、中堅、若手アーティストが滞在し、2015年にはオランダのヘルスケアにおける最優秀芸術プロジェクトに授与される「エリザベス・ヴァン・シュトリンゲン賞」を受賞した。

### パーク・フィクション/マルギット・ツェンキ/クリストフ・シェーファー Park Fiction / Margit Czenki / Christoph Schäfer

1995年、ハンブルグ（ドイツ）の貧困地区ザンクト・パウリの川沿いの土地に高層住宅とオフィスビルを誘致しようとする市の開発計画に反対してコミュニティ・プロジェクトを開始。地域住民の組合とアーティスト（クリストフ・シェーファー）、映像作家（マージット・センキ）が主導し、単なる抗議運動をするのではなく、開発予定地を自分たちの公共空間として、住民とともに、ゲーム、ピクニックやフェスティバル、展示、集会などに利用し続けた。また、ホットライン、アンケート、地図、インスタントカメラなどを備えた可動式の“プランニング・コンテナ”をつくり、近隣を回って、住民から要望を集め、実際の公園計画を作成。さらに、「ドクメンタ11」（2002年）をはじめ、多くのアート・イベントや音楽祭に、A.ロドチェンコの「Worker's Club」を参照したドキュメンテーション/インスタレーションを出展。こうして、パーク・フィクションの活動は広く知られることとなり、その結果、2005年、市は計画を断念し、公園が実現した。その後も市民と分野横断的な専門家による開発事務所（PlanBude）を運営している。

### プロジェクト・ロウ・ハウス Project Row Houses

プロジェクト・ロウ・ハウスは、アーティスト/アクティビストのリック・ロウを中心に、ジェイムス・ベティソン（1955-1997）、バート・ロング（1940-2013）、ジェシー・ロット、フロイド・ニューサム、バート・サンプルズ、ジョージ・スミスによって、テキサス州ヒューストンの「第3区」で1993年に開始。アートを触媒としてコミュニティの再生を目指すプロジェクトであり、それを運営するNPOの名称でもある。リック・ロウは1961年、アラバマ州生まれ。ヒューストンのテキサス・サザン大学に学び、社会問題をテーマとした絵画や彫刻作品を制作。1990年代初めから、アフリカン・アメリカンの居住区として長い歴史を持つ第3区の生活や文化を描き続けた画家ジョン・ビガーズやドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻」の考え方に影響を受け、コミュニティの社会的、経済的、文化的ニーズに直接応える活動に方向転換。打ち棄てられていた22戸の住宅を仲間とともに買い取り、改修して、アートと社会サービスを複合したプロジェクトに展開していった。

## 会場展示アーティスト（日本）

---

### 高川和也 Kazuya Takagawa

1986年、熊本県生まれ。東京藝術大学修了。近年は、膨大な情報が結合/交差する空間としての自己をモチーフに、インタビューやポートレイトの制作を行う。主なプロジェクトに、数ヶ月間に渡って自身が受けたカウンセリングを記録したドキュメント「Ask the self」(Tokyo wonder site Hongo / 2016)など。客体化された大文字の「社会」ではなく「自分」を動かすこと。その「自分」という枠組みを拡張可能なものにしていくことが急務であるとする。

### 丹羽良徳 Yoshinori Niwa

1982年、愛知県生まれ。文化庁新進芸術家海外研修制度によりウィーン在住。不可能性と交換を主軸とした行為や企てを路上などの公共空間で試みることで、社会や歴史へ介入する作品を制作。多くの場合は、交渉の失敗などを含めたプロジェクトの一部始終を収めた記録映像を展示する。震災直後の反原発デモをひとり逆走する「デモ行進を逆走する」(2011)や都市の抗議活動を無関係な観光地まで延長させた「首相官邸前から富士山頂上までデモ行進する」(2012)など自身の状況を転置することで眼に見える現実を解体し「公共性」という幻想のシステムの彼岸を露出させる。近年は、共産主義思想の受容のされかたの変化に注目した「日本共産党とカール・マルクスの誕生日会をする」(2013)や、全国の霊媒師やイタコらに依頼し歴代の町長を霊界から呼び寄せ表敬訪問を試みた「歴代町長に現町長を表敬訪問してもらう」(2016)など。

### 藤元明 Akira Fujimoto

1975年、東京生まれ。東京藝術大学卒業。1999年コミュニケーションリサーチセンターFABRICA(イタリア)に在籍後、東京藝術大学大学院修了。社会、環境などで起こる人の制御出来ない現象をモチーフに、絵画・オブジェクト・映像・インスタレーションなど様々な手法で展示やプロジェクトを展開。都市の隙間を活用するアートプロジェクト《ソノ アイダ》を主催。主なプロジェクトに《2021》《NEW RECYCLE®》。展示「HEYDAY NOW」(COURTYARD HIROO・2015年)、「Negentoropy」(HAGISO、2014年)、「この都市で目が覚めて」(HIGURE 17-15 cas、2016年)など。

### 山田健二 Kenji Yamada

2008年、東京藝術大学卒業。東京、ロンドンを拠点に活動。固有の文化圏に遺る民俗知や遺跡、戦争遺産を含む近代遺産などを国際社会の中で流用・誤用することで生まれる葛藤や矛盾を共有するための社会実践や表現活動を行なう。3.11以降、日本やヨーロッパを中心に各地を環境難民のように移動しながら継続する彼の活動は、より流動的な社会的立場の人間が国際社会にどう働きかけられるかという実践を含みながら、その臨界と限界に無数の段階を拡張し、新たな思考のグレースケールを浮かび上がらせる。主なプロジェクトに《別府地熱学消化器美術館》(2011年)など。

### 若木くるみ Kurumi Wakaki

1985年、北海道生まれ。京都市立芸術大学卒業。自らの身体を作品の素材に用いた力づくの表現で、第12回岡本太郎現代芸術賞(2009年)、六甲ミーツアート大賞(2013)受賞。坂本善三美術館での個展「若木くるみの制作道場」(熊本、2013年、2014年)では、30日間で30作品、新作を発表した。近年の主な展示に「また起きてから書きます」(アキバタマビ 21、2016年)、「ユニフォーム」(Ponto15 / Finch Arts Gallery、2016年)、「六本木アートナイト2016」など。